
手紙

太美

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【Nコード】

N5784E

【作者名】

太美

【あらすじ】

懐かしい手紙を読み返して、心が温まったところなのに・・・

仕事をやめた。

仕事はやりがいがあったけど、先輩からの妬み、僻み、嫌がらせ・
・・・

そんな事に煩わされるのが嫌になった。

社会人になっても、こんな世界があるのかと正直驚いた。

こんな事に負けるのは悔しいけど、自分の身を守るためには仕方が無い。

上司のストーカーが始まってからは、生きた心地もしない。

そこで、会社を辞めて引越を決めた。

荷物を整理しているとクローゼットの奥に、埃にまみれた小箱が出てきた。

アクセサリーでも入れてたのかと思い、箱を開けてみた。

中からは懐かしい手紙が出てきた。

学生の頃の彼からの手紙。

手紙には、いろんな思い出が詰まっていた。

懐かしい文字を見て、そんな懐かしい時代が頭の中を駆け巡った。

その時に悩んでいた事、不安に思ってた事、これからの二人の事。

何でも相談して、答えを導き出していた頃。

社会に出て、なんとなく疎遠になった彼。

メールがあつたのに、文字にした方が気持ち伝わるからと言って書いてた手紙。

何通か読み返すと、気分は学生時代に戻っていく。

「俺、本当にお前の事が好き。文字にしてみると、よくわかる。」

そんな文字を見て心が痛くなる。

なんて事のない文字、一文字一文字に彼の気持ちがにじみ出ている。

何通か目を通した後、最後の一通になった。

そこには、携帯の番号が載っていた。

「懐かしく思ったら電話をくれ。絶対番号は変えないでいるから」

こんな手紙、もらってたっけ？と思いながら懐かしさのあまり電話をする。

ワンコール・・・・・・・・

ツーカー・・・・

スリーコール・・・・

私は何をやってるんだろう？

段々恥ずかしくなってきた。

彼がもし出たら、何を話すんだろ？

衝動で電話してみたけど、本当に彼が出るんだろうか？

不安になって、電話を切ろうとした時

「もしもし・・・・」

懐かしい彼の声がした。

「もしもし・・・・」

私は声が出せない。

「もしもし・・・・もしかして・・・・」

勇気を出して話してみた。

「久しぶり。元気？」

「やっと、電話してきてくれたか！」

話をしてるうちに、涙が溢れてきた。

今まであった、つらかった事が嘘のように消えていく。

彼は地元に残り、家業を継いでいるらしい。

「大丈夫か？今度、こっちに来ないか？」

一人で生きるのに疲れてた私。誰かに支えて欲しかった。

少し、心が温まった夜部屋のチャイムが鳴る。

ドアさえ開けなければ、上司は入ってこれない。

恐る恐る、確認のため、のぞき窓から覗いてみた。

彼だった。

慌ててドアを開ける。

抱きしめられて、身をゆだねる。

よく考えてみると、彼は私の今の住所を知らない。

慌てて、身体を離し、相手の顔を見る。

そこにいたのは、彼でもなく、上司だった。

恐ろしい顔で私を見つめている。

「お前、何で仕事を辞めたんだ？俺と言う奴がいるのに、なんて女だ！」

そついい終わると同時に、お腹の辺りに衝撃が走った。

「これで、お前は一生おれのもんだ！」

そう笑いながら、上司は走り去っていく。

力が抜け、膝から崩れ落ちた。

お腹の辺りを触ってみると、血が出ている。

お腹を押さえ、這いながら携帯を捜す。

119に電話して、朦朧とするなか何とか話した。

電話を切り終わると、意識が薄れていく。

なんだか、とつても眠たい。

まぶたが重く感じる。

眼を閉じてみた。

そこには、懐かしい彼の顔がある。

私を優しく抱き起こしてくれた。

せつかく起こしてくれたのに、私は彼の元から離れていく。

彼がどんどん小さくなっていく。

彼の声も聞こえなくなっていく。

私一人でいたい何処にむかうのだろうか？

辺りが真っ暗闇に包まれた。

（後書き）

少しありきたりな展開になりましたが・・・
読んでいただき、ありがとうございます。
今後の参考にぜひ、コメントをお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5784e/>

手紙

2011年1月1日14時47分発行